

令和3年度  
入学試験問題

国  
語

(50分)

注  
意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力高等学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の一線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、主君に恭順の意を示す。
- 2、交通事故が漸減する。
- 3、彼は生粋の江戸っ子だ。
- 4、交差点では殊に注意が必要だ。
- 5、今日の繁栄の礎を築いた偉人。
- 6、条約をヒジユンする。
- 7、交通費のセイサンをする。
- 8、カンキユウをつけた展開で惹きつける。
- 9、イチマツの不安がよぎる。
- 10、有名脚本家のギキョクを上演する。

□ 一線の言葉が正しく使われているものはA、そうでないものはBとして、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、汚名挽回の機会を得る。
- イ、議論が煮詰まって結論が出なかった。
- ウ、相手の無礼な態度に我慢できず色をなした。
- エ、心の琴線に触れる音楽に、涙を押さえられなかった。
- オ、自分の実力ではとても役不足で務まらない。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

時は近未来。我が子をジャングルジムの事故で亡くした「私」は、父親としての傷がいえず、公園に近寄ることを意識的に避けて生きてきた。しかし、十五年後に足を向けた公園は、予想外の姿になっていた。

危険具……。それは、十五年ほど前に生み出された言葉だった。

確かに昔は、回転ジャングルジムやシーソーなど、子どもが少し羽目を外せば事故につながるだろう遊具が、何の注意書きもなく置いてあったし、擦り傷やたんこぶは日常茶飯事だった。

だが、管理する施設すべてに「責任」の所在が求められるようになって、リスクを背負ってまで遊具を存続させようとする<sup>①</sup>気概のある自治体は存在しなかった。<sup>②</sup>あいついで「危険具」は撤去されていった。

「それにしたって、砂場くらいあってもいいでしょう?」

「砂場だって? そんなもんがあったら、猫が入り込んで糞ふんをするじゃねえか」

その砂で子どもを遊ばせては「危険」というわけだ。

さまざまな「危険性」から、公園の遊具は撤去されていった。もちろん、危険がなく、安全に暮らせることは、現代社会の理想である。だが、すべての「危険性」を排除しようとするれば、人は誰も、家から一步も出られなくなってしまう。

「危険具が無くなって以来、この公園は実に十四年間、無事故記録を更新しているんだ」

管理人は、そう言って胸を張った。だがそれは、<sup>③</sup>高架化した鉄道で踏切事故が発生しないようなもので、誇るようなことではないだろう。

「遊具……危険具はさておき、木の一本も無いのは、どういうことですか?」

季節は、春から夏へと移ろう頃で、午後の日差しはきつい。

公園は、子どもの遊び場であると同時に、憩いの場でもあったはずだ。これでは、木陰でほっと一息をつくことも、葉風を感じることもできない。

「セミだよ」

「セミ?」

「セミがうるさいって苦情が周辺住民から来てな。特に昔は公園にや街灯があつて、夜も明るかったもんだから、一晩中セミが鳴いていたんだよ」  
繁華街の夏の公園では、かつては珍しくもない光景だった。その騒がしさも含めて、夏の

A

だったのだ。

「その頃は、二十メートルもある長い棒を持ってな、セミが公園の木に止まったといっちゃ、追いかけてたもんさ」  
管理人の男は、なぎなたでも振り回すような恰好で、当時の様子を得意げに振り返っていた。

「とはいっても、全部のセミを追いかけるわけじゃないし、管理人が一日中セミを追いかけてまわすってわけにもいかないからな。そのうちこの公園も、木を植えないってことになったのさ」

「遊具に続いて樹木も撤去された公園は、人々の「憩いの場」としての機能も失ってしまった。

「ベンチも無いんですね」

「営業回りに疲れたサラリーマンや、散歩の途中の老人たちにとって、<sup>④</sup>なくてはならない存在のはずなのに。

(中略)

そして、不審者対策としてフェンスで囲まれ、夜は施錠されるようになってから、街灯も必要ではなくなった。遊具(危険具)、樹木、ベンチ、街灯と、引きはがされるように撤去されていった公園は、単に芝生が植えられただけの空間になってしまったのだ。

「この公園は、この国にたった一つだけ残った、貴重な公園なんだ」

管理人は胸を張るが、それは、「残された」のではなく、たまたま残ってしまったというだけにすぎないのだろう。多くの市が財政破綻の危機を迎え、緊縮財政に陥る中、<sup>⑤</sup>「公園」は聖域ではなくなった。大規模工業地帯を抱えるこの市は、財政状況に比較的ゆとりがあって、「公園」が削減の矢面に立つことがなかったというだけのことには違いない。雨上がりに地面に残った水たまりのような、いずれ消えてしまうことを運命づけられた存在だった。

「入ってもいいですか？」

「なんだと？」

管理人は、思いがけないことを聞いた表情で、顔を上げた。

「あ……あなた、公園に入る気か？」

まだ半信半疑の声で、管理人は私に念押しする。

「ええ、いけませんか？」

「い……いや、そりゃあ公園は誰にでも自由に開かれた場所だから、入っちゃいけないってわけはねえが」  
男は、今までの横柄な態度はどこへやら、<sup>⑥</sup>急にしどろもどろになった。

「ちよ、ちよと待ってくれよ。何しろ、前回の利用者が入ってから、三年も経ちまってるからな」

男は小さなプレハブ小屋に入ると、古びた書類整理棚を引っ掻き回していた。

「ああ、これだこれだ。あんた、コイツを確認してくんな」

看板と同じだけの禁止事項が書かれた確認書類だった。三枚複写式になっている。私は、禁止事項の一つ一つに確認のチェックを入れていき、身分証明書と共に提出した。男はプレハブ小屋の中に戻って、書類を何度も確認していた。

「よし、それじゃあ、次は誓約書だ」

男は、別の引出しから、違う書類を取り出した。

「自由で開かれた場所に入るのに、誓約書が必要なんですか？」

「自由で開かれているからこそ、それぞれの考える『自由』ってやつを振りかざして勝手気ままに振る舞ったら、衝突しちゃうだろう？ 事故が起きないように、車に乗る時は、誰もが交通規則を守る。それは公園も同じってことさ」

それはすでに「自由」という言葉の概念から逸脱しているように思えたが、私が今さらどうこう言っても始まらない。感情を押し殺すようにして、私は誓約書に署名した。

「これでいいですか？」

「待て待て、最後に荷物のチェックだ」

「危険物は持っていませんよ」

「規則だからな。従わなきゃ入れないぞ。鞆の中を見せるんだ」

有無を言わず、男は私の鞆に手をかけて、蓋を開けた。まあ、見られて困るものなど入っていないし、危険物などもつてのほかだ。

「ほらあった。あんた、これは持ち込めないんだ。ここに一時的に預けてもらうぞ」

「電話ですか？ 構いませんが、どうして危険物でもない電話が規制されるのですか？」

「あれだよ、心臓のペースメーカーに負担がかかるっていう」

「今は電車の優先席付近でも、そうした規制は無くなっているはずですが……」

ケータイからスマートフォン、そして通信方法が一新された「ハンディ」の時代が到来し、そうした懸念は完全に払拭された。今では電車の優先席の目の前でハンディを操作していても、誰も文句は言わない。

「携帯電話の初期の頃の基準で決められていて、それ以来、変わっていないからな。まあ、<sup>⑦</sup>規則は規則だから。俺はその通りにするしかないんでな」

「わかりました」

誰も遊んでいない空間で、事故が起きるはずもなかったが、私はハンディを管理人に預けた。

「よし、他は何もないようだ……」

そう言いながらも、彼は、なかなか「許可」の印鑑を押さない。

「もう、入ってもいいですか？」

「ええっと、待ってくれよ。これで手続きは全部終わったはずだよ……」

何しろ数年ぶりの「利用者」なのだ。彼が手順を確認してしまうのも、無理はないだろう。

「よ、よし……。それじゃあ、鍵を開けるぞ」

鍵を開けてもらい、私はようやく、「公園」の中に一步を踏み入れた。

フェンスに囲まれた、バスケットコートほどの空間は、外から見ていた通り、地面と芝生以外には何もなくて、入ったからと言って、何かが変わるわけでもないし、新たな発見があるわけでもなかった。

それでも私は、公園を「利用」すべく歩いて、中央に立った。

ただ一人、<sup>⑧</sup>立ち尽くすしかない。

だがそれが、今の公園の正しい使い方でもあった。

走ることも、座り込むことも、誰かと話すことも禁じられた公園で、架空の前衛芸術作品を前にしたように、私は立ち尽くす。

「自由で開かれた場所」であることを求められ続けた結果、「不自由で閉ざされた場所」へと行き着いた公園から、本来の主役である子どもたちの姿は消え去った。

(三崎 亜記「公園」より)

問 一、——線①「気概のある」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、相手にひけをとらない経済力がある。

イ、他者をだしぬく狡猾さがある。

ウ、冷静に物事を判断する力がある。

エ、困難にくじけない強い精神力がある。

問二、——線②「あいついで『危険具』は撤去されていった」とありますが、この社会で最も大切とされていた理念は何ですか。文章中から十  
五字で探し、抜き出して答えなさい。

問三、——線③「高架化した鉄道で踏切事故が発生しないようなもの」とありますが、これはどのようなことをたとえたものですか。最も適当  
なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、システムが発達して安全であること。

イ、危険が迫っておらず安全であること。

ウ、起きる可能性が全くないこと。

エ、起きる可能性がとても低いこと。

問四、Aにあてはまる「ある季節に特有の情景」を表す言葉を考え、漢字三字で答えなさい。

問五、——線④「なくてはならない存在」とありますが、ベンチを含め、公園は、どのような意味で「なくてはならない存在」のですか。そ  
のことが具体的に書かれている部分を、文章中から十三字と八字で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

問六、——線⑤『公園』は聖域ではなくなった」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として適当でないものを次から一つ選  
び、記号で答えなさい。

ア、気軽に訪れ楽しむことができるような心より所ではなくなったということ。

イ、足を向ければ癒しを与えられるような特別な場所ではなくなったということ。

ウ、それぞれの目的を持って訪れなくなるような空間ではなくなったということ。

エ、十分な予算が配分されるような特別扱いする対象ではなくなったということ。

問七、——線⑥「急にしどろもどろになった」とありますが、「男」がこのような反応を見せたのはなぜですか。その理由として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、久しぶりの入園者に、どのような手続きをすべきかすぐに思い出せず、不安になってきたから。

イ、見知らぬ訪問者が、何もない公園でいったい何をしでかすのか見当もつかず、心配になってきたから。

ウ、久しぶりの入園者に対して、面倒な手続きをしなければならないことが、苦痛で仕方なくなったから。

エ、見知らぬ訪問者が、この公園に対して思いがけない要望を口にしたことに、心の底から驚いたから。

問八、この文章で「管理人」は「自由」に対してどのような解釈をしていますか。文章中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問九、——線⑦「規則は規則だから」とありますが、ここから読み取れる「管理人」の姿勢を四字熟語で考えて答えなさい。

問十、——線⑧「立ち尽くすしかない」とありますが、ここから読み取れる「私」の気持ちとして適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、公園に入っても、なすすべのない自分に対して、やりきれない気持ち。

イ、公園に入っても、することも居場所もないことに対して、途方に暮れる気持ち。

ウ、あまりにも変わり果てた公園に、たとえようない衝撃を受ける気持ち。

エ、あまりにも機能を失った公園に、存在価値を見出せず悲嘆に暮れる気持ち。



四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今日一日の中で、① 何かを「結んだ」あるいは「縛った」であろうか。

資源ゴミを出すために雑誌を重ねて紐で結んだ。それ以外には？ 靴紐を結ぶ。そして？ もうない。 A そのような行為も週に一度ぐらいかも知れない。

つい最近まであった新聞紙を重ねて紐で縛るといふ作業は、新聞紙の回収が袋の使用になったためになくなった。小包を出す時に紐で結ぶことも、宅配便袋や段ボール箱になったためガムテープがとって代わった。寝間着は浴衣なら紐で結ぶがパジャマなら結ばない。裁縫をしなければ、糸の端を結ぶということもない。もはや肉を竹の皮で包むこともないから、竹の紐を結んだり解いたりということもない。茶の湯の稽古でもしい限り、茶碗の箱の紐や掛け軸の紐や仕覆（注1）の紐を結んだり解いたりすることもない。もちろん着物はたくさん紐を使うが、着物を着なければまったく使わないし、着付け教室推奨の様々な器具を使えば紐は結ばない。

ちなみに、茶をたてて供するだけでも、複数の箱の紐、掛け軸の紐、複数の仕覆の紐、着物に関する紐など、十数本の紐を結んだり解いたりすることになるが、そのほとんどは現代の日常生活にかかわっていない。葬式や結婚式に列席するにも、水引は印刷されているかすでに袋に固定されて売っているため、ほとんどの人は自分で水引を結う経験をしない。唯一の例外はネクタイかも知れない。失った「結び」の生活はネクタイの中にかろうじて残っているのだが、 B これは今言っている「結び」とは異なる。ネクタイが結べたからといって他の結びがうまくはならないのだ。女子校であったにもかかわらずマニッシュな制服だったため、私は一〇代の六年間毎朝制服のネクタイを結んでいた。 C それによって着物の結びがうまくできる、ということではなかった。② 「結び」は私たちの身体から失われたのである。いったいどのくらい、どのような「結ぶ」行為が生活から消え去ったのであろうか。

衣類で言えばまず腰巻き。これには紐がついている場合とついていない場合とがあるが、どちらにしても布または紐を結ぶことによって初めて腰のまわりに巻くことができる。女は腰巻きで男は下帯（注2）であるが、下帯はふつうに使われる越中（注3）であればやはり、紐で結ぶことになる。その上に蹴出し（注4）。これも巻いて結ぶ。以上のような下ばきは、洋装ではすべてゴム紐になる。

汗取りや長襦袢（注5）はウエストのところで紐で結ぶ。襦袢は衿（注6）が動かないよう、高めの位置にもう一本伊達締めを使うこともある。これら下着にあたるものは、洋装ではかぶるかたちになっているため紐は使わない。着物はかつて重ね着した。その一枚ごとに最低一本の紐が使われるが、女性用の長い丈の着物であれば、腰紐、おはしより紐、おはしよりが長過ぎる場合にそれを畳んでおくための紐、衿がはだけないよう高めの位置で縛る伊達締めなど四本の紐を必要とする。その上に帯を締める。帯には帯締め、帯揚げが必要で、帯と合わせて三本の紐状のものを必要とする。このように勘定してみると、着物の場合、一二本の紐ないしは紐状のものを、その都度結んでいることになる。この上に羽織りを着るとさらに羽

織紐を結ぶことになる。

釘と接着剤が建築を変えたように、チャック、ボタン、スナップボタン、ホック、テープ、金具付きベルトが、紐や縄や「結ぶ」という行為をなくした。一六世紀には日本に西欧のシャツとズボンがすであって、ボタンは使われていた。D 長続きはしなかった。

結ぶ、縛る、という行為は、離ればなれの二つのものを付着しひとつにするためである。これを金属やプラスチックで短時間に付けることは、「時間」と「手間」を省いたことになる。結んだり縛ったりする行為は時間と手間と技能と力を必要とするのだ。登山をする人はザイルを結ぶために特殊な結ぶ技術をもつようになるという。登山や冒険は手間をかけることにこそ目的があり、その中で1とは異なる身体と精神の使い方をすることに目的がある。今やこのような行為の中にしか、「結ぶ」「縛る」は存在しない。私は着物を着ることを通して紐や帯を結ぶようになったが、できるようになるまでには修練を要した。手は背後にまわしたり縦横に動かしたり、ふだんと異なる動きをするのである。着物は今や登山や茶の湯と同じで、手間と時間をかけて不便の中で修練するものでなければ着られない。

「結ぶ」という言葉はかつて「解く」という言葉と対になっていた。

(中略)

紐は「緒」であった。緒は糸を縫い合わせて長くのびていくものなので、「生命」を意味した。「ひも」という音の語源は「ひめ(女性)の緒」であろうという説もある。「ひ(霊)」も「緒」も生命である。『万葉集』に頻出する紐の歌は、単に恋の歌ではなく、そこには彼らにとってもっと現実的で実体的な「魂の存在」がかかわっている。恋は観念ではなく、身体であり性であり生命であり運命であった。

③ 袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん——これは『古今和歌集』にある紀貫之のよく知られた歌である。光が乱反射し、その中を急速に時間が流れるじつに美しい歌だ。「結ぶ」「解く」という言葉はもはや、『万葉集』の時のように恋と性と笑いと情熱の歌を作る要素ではない。「結ぶ」のは紐ではなく手のひらである。手のひらにすくった透明な水が一瞬のうちに氷る、そこに春風が吹き、春の光の中で瞬く間に融け、指のあいだからこぼれてゆく。そこには、ひとときととどまることのない絶えざる変化がある。なかなか解けなかった、まためつたに解いてはいけなかった「結び」は、時間の推移とともにあっけなくも解けてしまうのであり、それこそが美しいのだという美意識がここには確立している。「結ぶ」「解く」という言葉だけで、④ ことも異なる美意識を、歌の言葉は発見してきた。

⑤ 草枕結びさだめんかたしらすならぬ野べの夢のかよひぢ——これは『新古今和歌集』の藤原雅経の歌である。ここで結ぶのは枕であり、その枕もなかなか置き所を定められない。しかも夢の中で、あるいは夢を夢見て(願望して)。この時代、「結ぶ」という言葉は水を手で結ぶだけでなく、枕を結ぶ(同じ意味で草を結ぶ)、露を結ぶ、夢を結ぶ、氷を結ぶ、という情景の中で使われた。移動する、変化する、消え行くものばかりだ。「結び」はますますはかないものになっていったが、それはまた、そのはかなさ、その無意味さが美しいと考える時代の出現であった。無意味な形、そこに至る過程を⑥ 形骸化」ともいうが「様式化」ともいう。様式は無駄なものではない。文化の歴史上では、様式にのっとってはじ

て、日常生活の中に日常の彼方のものが呼び込まれるのである。「結び」はそのための道具となった。

(田中 優子「布のちから 江戸から現在へ」より)

(注1) 「仕覆」……茶を入れておくための容器を入れる袋。

(注2) 「マニッシュユ」……女性の服装などが、男性的であるさま。

(注3) 「越中」……越中ふんどしのこと。長さ一メートルほどの小幅の布の一端に紐をつけたふんどし。

(注4) 「蹴出し」……和装で、女性が腰巻の上に重ねてつける布。裾よけ。

(注5) 「長襦袢」……着物の下着で、着物と同じ長さのもの。

(注6) 「伊達締め」……着崩れを防ぐため、帯の下に締める細帯。

(注7) 「おはしより」……女性の着物で、着丈より長い部分を腰の辺りで紐で締め、たくし上げること。また、その部分。

問一、——線①「何かを『結んだ』あるいは『縛った』であろうか」とありますが、「結んだ」り「縛った」りすることの目的は何ですか。文章

中から一文で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問二、

A
---

 ~ 

D
---

のうち、逆接の接続詞が~~あてはまらないもの~~を一つ選び、記号で答えなさい。

問三、——線②『結び』は私たちの身体から失われたのである」とありますが、「結び」に関する説明として最も適当なものを次から選び、記

号で答えなさい。

ア、茶道における「結び」の一部は、資源ゴミや小包を出す際の「結び」として現在も残っている。

イ、日本人に比べ、西洋人は「結び」を軽視しているため、洋装では紐を「結ぶ」ことがあまりない。

ウ、登山では、ザイルを「結ぶ」ことこそが重要視され、他の「結び」は精神の鍛錬のために行われる。

エ、「結び」の過程が多く存在する和装においては、「結ぶ」行為は非常に労力と暇を要するものである。

問 四、

1
---

・

2
---

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、1—常識      2—非常識
- イ、1—日常      2—非日常
- ウ、1—自然      2—不自然
- エ、1—自由      2—不自由

問 五、——線③「袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん」とありますが、この和歌において「結ぶ」はどのような意味で使われていますか。文章中から五字以上十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問 六、文章中の『万葉集』に関する説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、「緒」を意味する紐は、「生命」を表していた。
- イ、紐の歌は、理想的な恋を表現していた。
- ウ、恋の歌は、具体的な存在とかかわっていた。
- エ、歌は、「結ぶ」「解く」とかかわっていた。

問 七、——線④「こころも異なる美意識を、歌の言葉は発見してきた」とありますが、『古今和歌集』における「美意識」はどのような考え方でか。文章中の言葉を使って、四十五字以内で説明しなさい。

問八、——線⑤「草枕結びさだめんかたしらずならはぬ野べの夢のかよひぢ」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、移動が多い旅のせいか、寝る時について枕を探してしまう。初めて訪れた野辺であるが、夢の中は草を結んだ枕ではなく、慣れ親しんだ枕を使って安らかに眠りたいと願うばかりである。

イ、草で結んだ枕の置き所もなかなか定められない。事前に詳しい様子を誰も教えてもらえなかった野辺で、せめて夢だけは見たいと願っているが、その願いも叶わないのではないだろうか。

ウ、旅先のわびしい宿りで、草の枕をどう結んでどこに寝ればよいか分からない。慣れない野辺で旅寝をし、夢の中で恋しいあなたに逢うためにはどのような枕の結び方をすればよいのだろうか。

エ、草の枕をもらったが、それをどこに置いたか忘れてしまつて困っている。これほど辛く苦しい野辺ではあるが、あなたからもつた枕によつて、少しでも苦痛が紛れることを祈るばかりである。

問九、——線⑥『形骸化』ともいうが『様式化』ともいう」とありますが、これを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

「結び」が 1、六字 になり、 2、四字 形に近づくという点では「形骸化」したと言えるが、 2 もものなることによつて、

日常の彼方のものが呼びこまれたという点では、「様式化」したと言える。

〔五〕 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、大隅おほすみの守かみの、国の政まつりごと したため行ふあひだに、郡こほりの司つかさのしどけなきことどもありければ、「召よしにやりて戒いましめむ」と言ひて、人遣りつ。さきざきかくしどけなき事ある折は、罪にまかせて重く軽く戒むることあり。それ一度ひとたびにあらず、たびたび重なりたることなれば、これも戒めむとて召すなりけり。

さて、「ここに召して候まうふ」と申しければ、さきざきするやうに、そへ伏せて、尻頭しりかしらにのぼるべき人、答こたへを切り設けて、打つべき人など設けてあるに、人二人して引き張りて、率ひて来たるを①見れば、頭かしらは黒き髪もまじらず、いみじう白う、見るに打たせむ事のいとほしうおぼえければ、「何事に事をつけて、これを許さむ」と思ふに、事つくべき事もなし。過あやまちどもを片端より問ふに、ただ老おいをのみ豪家ごうけにて答こたへへをり。「いかにしてこれ許してむ」と思ひて、②おれはいみじき盗人かな。さはありとも、歌うたは詠よみてむや」と言ふに、「はかばかしうはあらずとも、仕つかまつりてむ」と答ふ。「いで、さは詠め」と言へば、程もなく、③わななかしてうち出だす。

年を経て④頭に雪は積もれどもしもと見るにぞ身は冷えにける  
と詠みたりければ、守、いみじう感じ、あはれがりて、許してやりてけり。

〔古本説話集〕より

(注1) 「しどけなきこと」…「だらしないこと」の意。

(注2) 「答」……………むち。

(注3) 「豪家」……………頼りとする権威あるもの。ここでは「口実」の意。

(注4) 「答へをり」……………「答えていた」の意。

(注5) 「詠みてむや」……………「詠めるか」の意。

(注6) 「しもと」……………「答」と「霜」という二つの意味を込めている。

問 一、——線①「見れば・」③「わななかしてうち出たす」とありますが、主語として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、大隅の守      イ、郡の司      ウ、むちで打ちすえる役目の者      エ、罪人を連れてきた者

問 二、——線②「おれはいみじき盗人かな」とありますが、これはだれがどのような意図で言った言葉ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、大隅の守が郡の司を許そうと思いつつ、郡の司を非難する口上として言った言葉。  
イ、大隅の守が郡の司を許してよいか迷い、郡の司の反応を見ようと挑発して言った言葉。  
ウ、郡の司が大隅の守に何とかして許してもらおうと思ひ、自分を卑下して言った言葉。  
エ、郡の司が大隅の守からは許してもらえないだろうと諦めて、強気で悪ふつて言った言葉。

問 三、——線④「頭に雪は積もれども」とありますが、「頭」の「雪」とは何をたとえたものですか。漢字二字で考えて答えなさい。

問 四、この文章の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、郡の司は、役人としては問題が多かったが歌人としての評判は高かったので、大隅の守は一度その歌を聞いてみたいと思っていた。  
イ、郡の司は、取り調べの時に大隅の守から和歌を詠んでみよと命じられ、その場で機転の利いた和歌を詠み、大隅の守を感心させた。  
ウ、大隅の守は、雪の降り積もる中、地に額を擦り付けて許しを乞い続ける郡の司の姿にたいへん憐れみを感じ、郡の司の罪を許した。  
エ、大隅の守は、取り調べの場で初めて郡の司を見たが、あまりにも老いてみすばらしい様子に裁きを加える勢いが削がれ、無条件で放免した。

